



TITLE:

季節と共に興廢する能登沖舢倉島の漁村

AUTHOR(S):

石井, [逸]太郎

CITATION:

石井, [逸]太郎. 季節と共に興廢する能登沖舢倉島の漁村. 地球 1926, 5(4): 334-341

ISSUE DATE:

1926-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183083>

RIGHT:

季節と共に興廢する能登沖舢倉島の漁村

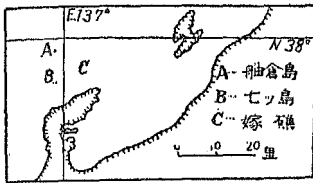
石井逸太郎

一、緒言

昨年八月下旬、余は能登半島巡檢を試み其の北岸輪島町に至りし際恰も石川縣下町村長百餘名の一行舢倉島見學の企あるを聞き同町役場に乞ふて之に参加するの僥倖を得、一日同島を訪問せしが聚落地理の上より極めて興味ありと考ふるが故に茲に其の概略を記す事とせり。

二、位置及面積

輪島沖に七ツ島とて無人の島嶼及岩礁の點列せるものあり大島、狩又島、龍島、荒三子島、島帽子島、赤島、御厨島の七つを數ふる處より斯くは命名せられたるが更に遙か



其の沖東經百三十六度五十五分、北緯三十七度五十分の地點に當り周回僅かに六籽、面積五平方籽なる一小孤島の横はるあり、輪島町を北に距ること海上七十二籽なれば能登半島の海岸よりは其の島影を見出す事能はず然れば世人の注意を惹きし事も殆んど其の地方のみに限られ廣く世に知られざりしは寧ろ當然といふべし。

三、地形及地質

七ツ島は其の六つ迄は輪島海岸より指呼するを得れども舢倉島は遠き上に低平にして最高點と雖も一二、四米に過ぎざるが故に輪島海岸よりは勿論七ツ島附近迄航するも尙地平線下に隠れて其の影を見る事能はず島間近迄航して始めて之を認め得べし、島は略長方形をなし東北より西南の方向に長く西は絶壁をなし東は比較的

海岸線の出入多く船舶はこゝに碇泊す、地質は安山岩より成れる熔岩臺地にして七ツ島も之と同一ならんか、七ツ島は船上より眺めて其の火成岩たるを知りたるのみなれば確なる事は言ひ難しと雖も之等は能登半島及佐渡島の火成岩と關係あるべく恐らく第三紀層を破りて噴出せしものならん、地質學的記述をなす事は主目的にはあらざれども理學士伊原敬之助氏の調査報文あれば其の要點を左に摘録するに「全島殆んど舳倉島安山岩とも稱すべき異様の感ある新火山岩より成り僅かに島の西端則ち恵比須堂、床岩（以上東北端の小角）大付、小付の岩塊（西南端）に輝岩を見るのみ安山岩は露頭に於ては窩狀多孔質にして黒色を呈し外觀全く玄武岩的なれども鏡下に之を検するに石基は微晶質にして輝石の斑晶は強き複色性を有し紫蘇輝石なる事一見して明かなり則ち本岩は輝石安山岩と命名するを至當とす、思ふに安山岩は此の輝岩層の大列罅に添ひ上昇し來りし一の裂罅噴出の遺物ならん」（地質學雜誌第二十卷第二百三十二號舳倉

島見聞録）

島の西岸には板狀節理をなせる處あり（寫眞

參照）



安山岩の板狀節理

尙「海底調査を試みたる結果同島は一枚の岩より成れる島嶼にして其の附近は遠淺なり舳倉島、七ツ島、及嫁礁と稱する暗礁

は三者鼎立し此の間數十哩は殆んど一枚の大岩盤にして海深十七尋乃至五十尋に過ぎず」（能登の輪島）、といふ記事あり之等を總合して考ふる

に此の熔岩流は廣く海底に流れたるものと見ざるべからず、而して此の島は斯かる絶海の小孤島なるに係らず極めて豊富なる淡水の湧出を見る事奇とすべく西岸にては波打際に近く海水と相接し湧出せる處もあり。

四、輪島町と舢倉島との關係

輪島町は人口一萬三千二百六人（第二回國勢調査）、半島屈指の都邑にして河井町鳳至町は



（一ノ分万五）島倉舢

河原田川の兩岸に發達せる主要部をなし而して西北海岸に發達せる海士町、輪島崎町を加へて四區より成れ



（一ノ分万五）町島輪

り此の中
海士町は
千二百二
十三人

（男五五五
女六六七）

即ち町全

體の一〇

%にして

海士のみ

の住居せ

る特別の

區域を作

り名の由來も又こゝに出でたるなり舢倉島の漁村は此の海士町の漁民が季節的移住をなす事によりて冬は淋しき無人島、夏は賑やかなる漁村を形成するに至る、彼等は毎年八十八夜に全町舉つて島渡りをなし二百十日に引き揚ぐといふ然れど年によりて多少の遲速あり昨年は六月十三日に渡り十月五日に引き揚げたり要するに一年の中百二十日内外即ち三分の一は此の島に假

住をなす事となるべし昨夏余が訪問當時に於ける人口を調査せしに左表の如し

渡者 一二二戸

男二九七人 女三三五人 (此の中就學兒童 男六六人 女六六人)

不渡者

五九戸

男一七一人 女二六九人 (男三四人 女四七人)

即ち六百餘人の者島渡りをなすが故に輪島町は俄かに淋しくなり殊に海士町は留守居の者のみ残り或は空家となれるに反して舢倉島は昨日の無人島今日は突如として一大漁村を形成し百三十五名の就學兒童の爲めには離れ小島に斯かる學校あるかと驚かしめし程の校舎あり四名の職員共に渡り更に一名の巡查も之に従ひ毎年駐在所を彼の島に移すといふ之余が季節的移動と題せし所以なり。

五、舢倉島の聚落と漁民と生業

舢倉島の漁村が季節的聚落を形成する所以は冬期海荒れ漁業の困難なるがためなり、島に於ける海士小屋發達の状態を見るに東海岸にのみ發達せるは地形の關係ある事勿論なれ共又烈しき西北及西南の風を避けんがためなり海士小屋とはいへ中には瓦葺にして二階建の一見裕福

なる建築も多く季節的一時的移住とはいへ毎年之を繰返すものなれば斯く永久的の建築をなしたるなり、中には一軒の家に二家族或は三家族住めるもあり、而して全島に十三の井戸ありて飲用及使用に十分なりといふ人間日常の生活に



舢倉島の海士小屋前庭に井戸あり

淡水の必要大なるは多言を贅するの要なし舢倉島が六百乃至一千の人口に對し何等差支なき迄豊富な

る水の湧出する事は實に漁村發達に故障なからしめしものにして發達原因の一として特筆に値すべし彼等は何を營めるかといふに多くは海女が海中深く潜りて磯草、蠔、鮑などを獲る事を以て主なるものとす、海中深く潜る事は壯年の男と雖も能くなし能はざる處而も海女は平然として之をなし十五尋の深きに潜るといふ其の

潜水に際してはサイジ(男子の用ふる杓)を用ひ貝金(鐵にて製し長さ一尺四五寸 種(の如きもの)を腰にし護謨縁の潜水眼鏡を取る傍護身用に供す)を腰にし護謨縁の潜水眼鏡をかけ麻繩を舟上の男に托し舟底を蹴つて下

る、覗眼鏡を以て其の様を見るに恰も天女の天下りをなすが如く水清冽なれば魚類の游げる處千紫萬紅の珍らしき海藻の中を探る様龍宮も斯くやと思はしむるものあり而して呼吸苦しくなれば腰に結びし麻繩を引きて舟上の男に合圖し男は急ぎ其の繩を引きあぐ、其の海面上に來るや一種の悲調を帶びし聲を發し聞く人をして閉息同情の念に堪えざらしむるものあり斯く女は働手となり男は舟上にありて其の作業を助くる助手たるに過ぎず故に彼等の間には女尊男卑の

風ありといふ、海士は海水中にありて仕事をなす爲め其の眼は異様に輝き又耳疾に犯さるゝ者最も多しといふ、彼等一千の漁民は漁士町區長の命令一下決して之に背く事なく子分の親分に對するが如き風習ありて區政の麗しき事他の能く及ばざるものありといふ。

漁獲高は舳倉島在留期間に於けるもの六萬圓内外に達す今昨年度の收獲物に就き表示すれば左の如し。

品目	收獲高	販路	備考
磯草	一六〇〇〇	主として長野諏訪地方	乾燥して
鮑	一八〇〇〇	主として石川縣羽咋、瀧地方	生鮑のまゝ
蠔	二七〇〇	能登北部三郡地方	鹽漬として
飛魚	五九五〇	主として新潟縣直江津地方	干して
其他	一四三五〇	能登北部三郡地方	鹽漬等

更に海士町一年間の漁獲高は二十萬圓に上るといふ。

六、史的考察

以上は余の昨夏訪問當時に於ける現状を縷述せしに止るものなるが茲に歷史上更に興味を惹くものあり、土俗の傳ふる處によれば永祿年間

(今より凡そ三百六十年前)筑前國宗像郡鐘ヶ崎の海人又兵衛なる者漁舟三艘に男女十二人を率へ能登國羽咋郡に漂着し赤崎、千ノ浦邊の海岸に假小屋を作り此處を根據として同郡及鳳至珠洲の沿岸島嶼に鮑を採る其の後鳳至郡光浦の北端(今尚海人屋敷と稱し其の遺跡を存す)に移住し天正年中藩祖前田利家巡視に際し熨斗鮑を獻じて謁を賜ひ鮑倉島及七ツ島にて鮑を捕る事を許さる寛永年間に至り男女百五十人なりしと雖も猶一軒の假屋に雜居せしかば熨斗監督役人の巡視するに際し其の醜體見るに忍びざるものあり依りて轉地を請願したりしに國主前田利常輪島鳳至町の地内一千歩を割きて之に賜ひ住居を定めしむ今の海士町之なり(海士史)と。

余は暴風のため一氣に筑前よりこゝ迄漂着せしと考へずとも此の附近は對馬海流の流るゝあれば移住の可能性は之を認め得べし然りと雖も余が茲に鮑倉島漁村の起源として右の傳説のみを以て満足されざるは能登國に三十三座の式内神社ある中其の一は此の島に鎮座さしますす奥津比咩神社を見る事之なり即ち式内神社を見んと

季節と共に興廢す能岩沖鮑倉島の漁村

いふ事は遠く延喜時代に既に人の住みたる事ありとなさるべからず萬葉集第十八越中守大伴家持の條、爲贈京家願眞珠歌一首竝短歌といふ處に次の如き記事あり。

珠洲の海士の 沖つ御神に い渡りて
珠洲乃安麻能、 於伎都美可采爾、伊和多利互、

潜ぎ 探るといふ 眞珠 五百個もがも
可都伎等流登伊布、 安波妣多麻、伊保知毛我母、

愛しきよし、 妻の命の 衣手の

波之吉餘之、 都麻乃美許登能、許呂毛泥乃、

わかれし時よ ねば玉の 夜床片去り
和可禮之等吉欲、 奴婆玉乃、夜床加多吉里、

朝寢髪 かきも梳らず 出でゝ來し
安佐爾我美、可伎母氣爾我受、伊泥氏許之、

歎みつゝ 歎くらむ 心慰さに
月日余美都追、奈氣久良牟、心奈具佐爾、

時鳥 來なく 五月の あやめ草
保登等藝須、 伎奈久五月能、 安夜女具佐、

花橘に 貫き雜へ 髪にせよと
波奈多知波奈爾、奴吉麻自倍、可頭良爾世餘等、

包みて遣らん

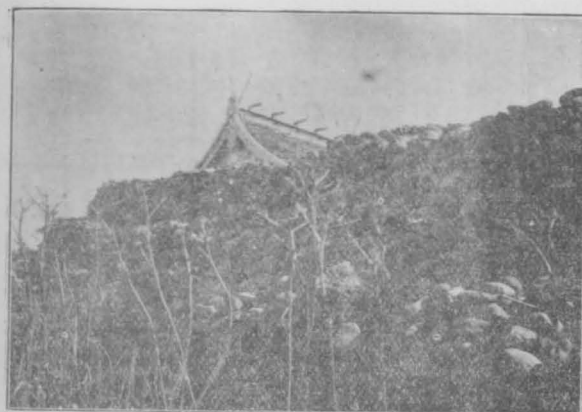
都追美氏夜良牟。

沖つ島 い行きわたりて 潜ぐちう
放伎郡之麻、伊由伎和多利互、
可豆真知布、

鰻玉もが つゝみて遣らむ

安波妣多麻母我、都々坐豆役真牟。

之等は明らかに萬葉時代既に海女の住せしを
物語るものとして充分の證據となるべし沖つ



(社神内式) 社神咩北津奥

りなめたぐ防を風南西及北西はるたげ上み積く高を垣石

島とは 船倉島
をさせ
るもの
なるべ
く船倉
島とは
何時の
頃より
いひ出
せるか
明かな
らず、
而して

此の時代を按ずるに恰も對岸渤海入貢の頃なり
渤海は越前加賀能登地方にて貿易せしか後には
朝廷にて期間を定めて屢々來らざらしめんとし
十二年に一度とせしが尙渤海は貿易上の利より
頻繁に來らんとせし事實に鑑み或は密貿易の地
となりし事はなきか、密貿易と迄は行かずとも
根據地としたる事なきか疑はし。又下りて今昔
物語に次の如き記事あり、「近來も遙かに來る
唐人は先づ其の島に寄てぞ食物を儲け鮑魚など
取て、やがて其の島より敦賀には出なる唐人に
も此の島ありとて人の語などぞ口固むなる」(加
賀國諍蚰蜈島行人助蚰住島語第九)

七、結 論

船倉島の漁村が季節的移動をなす事の珍らし
きのみならず其の起源の甚だ古き事より考へて
余は之を以て裏日本漁村研究上の一代代表的もの
として考へんとするものなり、裏日本が冬期
風浪高く積雪深く寒氣烈しくして屋外に於ける
生業休息の止むなきに至ることは表日本に比し
て自然的に恵まれざる點といふべく從つて船倉

島の如く漁民全部が引き揚げて冬期無人の廢漁村と迄ならずとするも寒漁村となるの例は其の數甚尠しとせず。

更に眼を廣くして考ふれば裏日本の人は夏期には北海道或は樺太に向つて季節的移住をなし冬期に歸り來る者甚多し、輪島海士町の漁民が舳倉村に季節的移住をなすは之が縮圖として考ふれば敢て小孤島なりと雖も其の研究の結果は及ぼす範圍大なりといはざるべからず殊に延喜

武藏野臺地に於ける水と聚落との關係

蘆 田 伊 人

「むさしのゝほりかねの井もあるものを、うれしくも水の近づきにけり」とは、千載集俊成の歌で、法華經の法師品の漸く濕土泥を見て、水の近きを知るの心を詠んだものであるが、その引合せに、武藏野の堀兼の井をだしたことは、

の昔より漁夫の住む處となり今日に至る迄漁村としての使命は依然として異なるなしと雖も今後は單にそれを繼承する以外に利用の道なきか、沖合漁業盛んとなるにつれて其の避難港としての價值は勿論交通上或は軍事上の用途なきか少しく考究を要する問題なりとす。(大正十四年二月稿)

文献 萬葉集 今昔物語 延喜式 特選神名牒 地質學雜誌
第二十卷第二百三十二號 輪島圖幅地質説明書 海士史
龍登の輪島

今茲に武藏野臺地に於ける水と聚落との關係を述ぶる余に取つては、一種云ふべからざる面白味を感ぜざるを得ない。武藏野臺地が古から水に渴望し、旅行者が水に憧がれた結果、逃水といふ一の幻象に接するが如き、又は掘ても掘ても水が出なかつたといふ所謂堀兼の井の傳説の如